

## *Wuthering Heights* の研究

— <月> の示す転換時点 —

宮 川 下 枝

“I think a certain harshness in her power and peculiar character only makes me cling to her more. Stronger than a man, simpler than a child.”

これは *Jane Eyre* の作家 Charlotte Brontë が *Wuthering Heights* の作家であり又妹である Emily Brontë を評した言葉であるが姉妹共に崇高なる愛を讃えた感銘深い作品を残した二人であれば、その環境を同じうし同じ荒涼たる英国北部の田舎のまちに牧師の家庭に育ち、同じくその Heath の丘をこよなく愛した人として、二人の性格、又作品に対する態度、自然に対する鑑賞、その捉え方がどのように異っているかを見極めるのは面白い勉強であると思う。一つ一つをあたって見ることは余りにも大きな研究になるので、前回の論文に於いて、私は *Jane Eyre* に於ける月の描写を通しての作品の構成、動き、又月の動きそのものと作家が進展させていく女主人公の心理描写などというものを考えて見た関係上、今回は『嵐ヶ丘』に於ける月は一体どのような役割を果たしているものなのであるか、どのように月を描いているか等の観点から『嵐ヶ丘』という作品をその筋と共に考察して見たい。

*Wuthering Heights* は W. S. Maugham の評する処に依れば世界十大作品に入る程の大作とされ、凄惨と迄思われる主人公 Heathcliff の残酷性はこれが女性の作品であろうかと怪しまれる程の迫力のあるもので、『月』の描写等というものは、この大作に於いては取るに足らぬもののようにさえ考えられそうなものではあるが、なかなかどうして細かく読んでいけば、数少い月の描写ではあるが、それが物語の筋々の Key point になっていることに気が付き、又嵐吹き荒ぶ激しいこの物語りの中に、月のシーンは非常に平和なムードを導入していることに気付くのである。Heath の丘に育った Brontë 姉妹にとっては、彼等を取り囲む自然は忘れ去ることの出来ぬ岩であり、沼地であり、風であり木々であった。姉 Charlotte は、彼女が常に親しんだ自然に溶け込み其処に吹く風に慰められ、荒野を照らす月に勇気づけられて彼女の人生の旅を歩いているのであるが、妹 Emily の場合に於いてはその Heath の丘〔小

説では常に *Wuthering Heights* と呼ばれている) に対する郷愁はなつかしさなどという生優しい感情を超えて一つの信仰となり切っているのである。小説の最初もこの *Wuthering Heights* の説明から始まる。

“*Wuthering Heights*” is the name of Mr. Heathcliff’s dwelling,

“*Wuthering*” being a significant provincial adjective, descriptive of the atmospheric tumult to which its station is exposed in stormy weather. pure, bracing ventilation they must have up there at all times, indeed: one may guess the power of the north wind blowing over the edge……”

(*Wuthering Heights* Chapter I)

荒涼たる風の吹きすさぶが故に *Wuthering Heights* と呼ばれていると述べられているが、この *Heath* の丘に対する強烈な郷愁故にこそ、子供時代を共に過した *Heathcliff* への憧れがあり、成長して別の人に嫁してもなお諦めることの出来ぬ深い強い愛着があるのである。この如何に振り切ろうとしても振り切れない深刻な愛着があつてこそ、それに応える *Heathcliff* の愛情があるのであり、如何なるものをも犠牲にしても主人公 *Catherine* への愛を全うし尽す処に残忍な復讐に燃える彼の行為も昇華される。それ等はさておいて順次に月の描写を拾い乍ら、それが *turning points* となっている物語の筋を追って見たい。

月に縋べてを打ち込んだかに思われ、月を追えば *Jane* の愛を追うことが出来る程の姉 *Charlotte* の作品構成に比し、妹 *Emily* の場合は、月だけが全てではなく、嵐、雨、風など烈しい気象が主要な部分を支えて居り、特に *Wuthering Heights* の方は嵐で形容されているので、月だけの場をあたって見てもそれによって主人公の心境の変化を知るべくもないが、とにかく月の出て来るシーンを吟味すれば、月、は物語の *turning point* として要所を支えていることが理解出来る。

[ 1 ] “It’s surely no great cause of alarm that *Heathcliff* should take a moonlight saunter on the moors, or even lie too sulky to speak to us in the hay-loft.”

(Chapter IX)

*Wuthering Heights* の豪農 *Earnshaw* 家の一人娘として育った美しい *Catherine* には一人の兄がいるが、父が何処からともなく連れて来た *Heathcliff* はこの上ない

よい遊び友達となるのである。二人は共に Heath の丘を駆け廻る。岩場に登っては幼い夢をはずませる。或日二人はふと駆け出したままに遠く離れた Grange の谷に住むもう一つの豪農 Linton 家を訪れて見ることもある。そこに育ちのいい二人の兄妹を見出し自分達とは全く別世界のあることを彼女は知る。やがてこの仲のよい Catherine も Heathcliff も成人し年頃となるが既に彼女の両親は他界し、前者はますます美しい娘として後者は農牧として境遇の差が二人の外見を変らせてしまう。その頃、Linton 家の息子 Edgar が彼女に求婚する。両親のない彼女の相談役は彼女を子供の時から育ててくれた Nelly であって、この時も彼女は Nelly に求婚されたことを打ち開ける。この Linton 家の後嗣であり又若くて美しい Edgar が Catherine に求婚したのは彼女の美しい容姿に惹かれてのことであるが、彼女がこれを受けようと思ったのは彼が金持ちであるとか、美貌に惹かれたとか、そんな外見的な事情だけでは決してない。自分一人にだけ秘めた深い Heathcliff への共感と idealistic love とが潜んでいたのである。

(1) "It would degrade me to marry Heathcliff now; so he shall never know how I love him; and that not because he is handsome, but because he's more myself than I am. Whatever our souls are made of, his and mine are the same; and Linton's is as different as moonbeam from lightning, or frost from fire." (Chapter IX)

たとえ Heathcliff にその思いは知らせていなくとも、彼の魂は同じもの二人は一心同体であって、彼は Catherine 以上に Catherine 自身であったのである。Linton の魂は Heathcliff のそれに比べれば月とすっぽん程にも、Catherine にとっては、違っていたのである。

"My great miseries in this world have been Heathcliff's miseries, and I watched and felt each from the beginning; my great thought in living is himself. If all else perished, and he remained, I should still continue to be; and if all else remained, and he were annihilated, the universe would turn to a mighty stranger, I should not seem a part of it.

My love for Linton is like the foliage in the woods; time will change

---

it, I'm well aware as winter changes the trees. My love for Heathcliff resembles the eternal rocks beneath: a source of little visible delight, but necessary. I am Heathcliff; He's always in my mind: not as a pleasure, any more than I am always a pleasure to myself, but as my own being." (Chapter IX)

自分の不幸はヒースクリフの不幸であり自分の考えは彼の中で働いて居り自分のヒースクリフへの愛は岩のように頑として変らぬものであり、冬が来れば枯葉のように散っていくリントンへの愛情とは全々異質のものであって比べものにならない。「私は、ヒースクリフだ」とカザリンは思った。とことん逆行こうとする自分の気持を誦い上げるカザリンの愛情は、作者 Emily が心の底に持つ idealistic love というものに対する徹底的な信念である。ほかの何物よりも異性間の idealistic love を貴いものだと考えている作者 Emily そのものがそこに顔を出している、だがこのように清く烈く Heathcliff を愛し乍らも彼女は Heathcliff とは結婚出来ないと言う。何故だろうか？。性愛を中心とする結婚生活はリビド（心的エネルギー）を性愛の段階に定着せしめて夫婦愛が idealistic love のレベルにまで昇華されていくのを、しばしば強力に妨げるからである。そればかりでは無い。作者 Emily やこの小説の女主人公カザリンのようにまだ結婚しない中に、すでに異性間の idealistic love の如何に貴いものであるかを体験したことのある人には結婚して性愛のレベルにまでリビドを退行させることは、屢々自分を墮落させる大きな危険を伴うことを知っているので、これを避けるべく決意を固くする場合がよく有るものである。“It would degrade me to marry Heathcliff” というカザリンの言葉は余すところなくこの間の消息を伝えている。

彼女の話の始めの「ヒースクリフと夫婦になったら、あたしは詰らない人間に墮落しますよ」という部分だけを盗聴したヒースクリフは忽然として皆の前から姿をかき消してしまふ。月夜に憧れて歩くのは彼の習慣として何も別に珍しいことではなかったらしい。これが月というものが最初に出て来る箇所である。 moonlight saunter 簡単な一語である。ヒースクリフは彼女の真意を知る由もなく誤解したままとび出してしまい、後 Wuthering Heights は大雨となる、その中を必死で探しても甲斐なく遂に諦めたカザリンは心ならずも新しい生活へと踏み切り、リントン夫人となり表

面上は幸福そうに見えても内心は空しい夫婦生活を始めることになるのであるから月には実に彼女の生活の転換時点 (turning point) をマークするものとして用いられているのである。

リントン家の大邸宅での贅沢な生活が始る。夫エドガーはやさしい人であるし別に不満はある筈はないのであるが、idealistic love を開発することのできない彼女の夫婦生活には心空しいものがある。二年の月日が流れる。表面上は何事もなく過ぎたこの家庭に突如としてヒースクリフがその姿を現わしてくる。

(2) “On a mellow evening in September, I was coming from the garden with a heavy basket of apples which I had been gathering. It had got dusk, and the moon looked over the high wall of the court, causing undefined shadows to lurk in the corners of the numerous projecting portions of the buildings. I set my burden on the housesteps by the kitchen-door, and lingered to rest, and drew in a few more breaths of the soft, sweet air; my eyes were on the moon, and my back to the entrance, when I heard a voice behind me say--” (Chapter X)

この物語は総べて女中 Nelly の口を通して話されることになっているから I とは Nelly を指す。激しい筆致で描かれているこの作にしては珍しい迄に穏やかな書きぶりに心おもひがする。九月の落ち着いた夕暮、一日の仕事を終えた女中は台所の戸口に腰を下ろしてはっきりしている。月が静かに見下している。あたりに漲る軟い空気、エミリーの作の中でこれ程繊細なタッチで描かれている月夜の風景はここだけである。

月の美しい秋の宵。突然予期もしない声が彼女に呼びかける。

“A ray fell on his features; the cheeks were sallow, and half covered with black whiskers; the brows lowering, the eyes deep-set and singular. I remembered the eyes……Is it really you?” (Chapter X)

黒いひげの生えている浅黒い頬、濃い眉、彫りの深い眼、月明りに照らし出されたその顔は紛うかたなきヒースクリフである。

---

“Yes, Heathcliff,” he replied, glancing from me up to the windows, which reflected a score of glittering moon……” (ibid)

ここで私が興味を持つのはシャーロットとエミリー姉妹の用いた人物の紹介の仕方である。シャーロットの場合、初めて登場する主人公 Rochester はくっきりと月の光に照らされてその顔を Jane に見せる。エミリーに於いても立派な青年紳士となって戻って来たヒースクリフは同じく月の光を浴びている。流石は姉妹であるとそのよく似た手法はほほえましい。

「そう。自分はヒースクリフだ。」「あの人は居るの?」二年間思い惚れた人を忘れかねて Heath へ帰って来て彼が見上げた窓のガラスには、月かげが千々に砕けて映っている。

“Are they at home? Where is she? Is she here? Speak. !” (ibid)

帰って来て真先に駆けつけたのはこの Grange の庭先であり、二年間の思いを潜めてはやる心をおさえ乍ら一時間もじっと時機の到来を待ち続けてやっと女中のネリーを見附けた彼の辛抱強さであった。

今迄は子供時代の淡い思い出に過ぎなかったものが別人のように立派に成長したヒースクリフを見ては彼に対するカザリンの思慕は生々しい現実のものとなり激烈に心の中に焼きつけられるのであるから、更に又一つの転回時点 turning point をマークするものとして月は用いられているのである。

(3) “Wuthering Heights rose above this silvery vapour; but our old house was invisible; it rather dips down on the other side. Both the room and its occupants, and the scene they gazed on, looked wondrously peaceful. “A person from Gimmerton wishes to see you, ma’ am.” (ibid)

ろうそくも点さぬままに窓辺に寄り沿っているリントン夫妻は月の光に輝く景色に眺め入っている。嵐の吹きすさぶ嵐ヶ丘とは異り、ここ Grange は緑に被われた谷間にかこまれている広い静かな邸宅である。遙かに遠く聳える嵐が丘は月の光に照らされて銀色に輝いている。あたりの空気さえ銀色のなかに溶けこんでいる平和な情景。

この平和は次に突如としておこるカザリンの心の波と対照して特にはっきりと際立

って美しい。嫁してもなお心は嵐が丘にある彼女の心が眺めとれる。

“by her face, you would rather have surmised an awful calamity.” (ibid)

の示す如く忽ちふりかかるカザリンの不幸を暗示している。

“I’m glad. I’m afraid the joy is too great to be real!” と再会を喜ぶカザリンに平和はもたらされなかった。陽気にはしゃぐ彼女に嫉妬する夫エドカーと激しい口論の末一室に閉じこもったまま彼女は何一つ口にせず寝こんでしまって本当の病気になってしまう。この病気がもとでカザリンは死んでしまうのだから、この場合の月も非常に平和な姿ではあるが、矢張り主人公の運命を大きく転回させて行く、turning point である。

秋も既に冬の半ばへと進んでいる。カザリンは引き続き長い病気をしている。

“We were in the middle of winter, the wind blew strong from the northeast, and I objected.”

熱に浮かされた彼女の頭には夢とも現とも分らぬままに嵐が丘が眼に浮んで来る。Peniston の岩の下に立っている自分を想像する。そこにヒースクリフの顔が見える気がする。彼女の切望するものは嵐が丘の家のなつかしい自分の部屋であり、もう一度触れたいと思うのは Heights から吹いて来る風である。

“I thought as I lay there, that I was enclosed in the oak-panelled bed at home; and my heart ached with some great grief which, just waking, I could not recollect. …… I was a child; my father was just buried, …… at twelve years old I had been wrenched from the Heights and every early association, and my all in all, as Heathcliff was at that time, and been converted at a stroke into Mrs. Linton……Oh, I’m burning’ I wish I were out of doors; I wish I were a girl again. Open the window again wide.”

(Chapter XII)

あゝあの頃はヒースクリフが私の縋ってだった。体が燃えるように熱い。外に出たい。窓を明けて、明けてと叫び乍ら、ふらふらとよるめきつつ寒い窓辺ににじり寄る。

(4) "There was no moon, and everything beneath lay in misty darkness; not a light gleamed from any house, far or near--all had extinguished long ago; and those at Wuthering Heights were never visible-- still she asserted she caught their shining.

"Look! she cried eagerly, that's my room with candle in it, and the trees swaying before it;"

(Chapter XII)

月はなく既に夜のとばりは早くおりてあたりは暗黒に包まれているのに彼女の目には輝く嵐が丘が見える。「あゝ私の部屋には灯がついている。木が風に揺れている、見てごらん」と彼女は叫ぶ。あたりは暗い霧に包まれどの家のあかりも見えないのに、彼女の心には聳え立つ嵐が丘が見えるのは、彼女のこの丘に対する深甚なる愛着を示すものであり、眼に見える外界の月ではなく、たとえ出ていなくとも煌々と輝いている肉面的な月の光に縋つてのものがくっきりと照し出されているのである。このカザリンの Heights への郷愁は即ちエミリーの持つ Heath の丘への烈しい執着であり、女中に自分の夢を物語った少女時代の話の中にも傷々しい迄に彼女の傷心の有様が示されている。

"and I broke my heart with weeping to come back to earth; and the angels were angry that they flung me out into the middle of the heath on the top of Wuthering Heights; where I woke sobbing for joy."

(Chapter IX)

たとえ天国に連れて行かれたとしても自分には Wuthering Heights の頂上に連れ戻された時の方が涙にくれる程嬉しかったとある。

ヒースクリフはカザリンの病を知ると居ても立ってもいられない気持にかられ、Grange に向け出していき、冒険とは知りつつ彼女の部屋に駆けこんでいく、彼の強い抱擁裡に Heights をなつかしみつつ彼女は息を引き取っていく、その一瞬間前に幼子は産ぶ声をあげる。夜中の十二時だったとあるが月は出ていない。

話は後半に移る。カザリンの生命を受け継いだ Cathy は父親の美貌、母親の気品を貰って女王のように成長していく。カザリンなき後の夫エドガーにとってはケージーが唯一の慰めであった。



一方ヒースクリフはエドガーの妹 Isabella を誑かして結婚するが彼の残虐性に辟易した彼女は国外に遁れ生れた子供 Linton を養育している。虚弱な子供を残したまま心痛と苦勞の為に彼女は他界する。エドカーはその子供を連れに行かねばならぬ。いとこが来るのだと聞かされたケージーは有頂天になり喜びの余り寝もやらず待ち続ける。母親の血を引いて容姿端麗な少年であるが体は非常に弱く叔父に連れて来た晩も長の旅路にへとへとになり誰に逢う気力もない。そのように弱り切った少年を、報らせをきくや否や、ヒースクリフは無慈悲にも早速連れ戻しにやって来る。たった一晚やさしい叔父の側に休むことを許されただけで少年は翌朝は早く Heights に引き立てられて帰っていく、楽しみに待っていたケージイーも少年の顔を見ることさえ許されぬ中にもう既に連れ去られている。

彼女は従兄に逢いたくて我慢出来ぬまま遂に父にも女中のネリーにも内証で禁じられている Heath の丘へ夜毎に抜け出して行く。

(4) “The moon shone bright; a sprinkling of snow covered the ground, and I reflected that she might, possibly, have taken it into her head to walk about the garden, for refreshment.” (Chapter XXIV)

地上の雪は月に照らされてキラキラと輝いている。女中のネリーはケージイーが散歩にでも出かけるのかしらと彼女の外出を眺めている。

“...but it was beautiful moonlight after tea; and, as I rode on, the gloom cleared. I shall have another happy evening, I thought to myself. I trotted up their garden.” (ibid)

秘密の外出がネリーにばれてしまった時、彼女は毎夜の思い出を楽しみつつ Nelly に話してきかせる。お茶のあとは月の美しい晩で今夜もきっと楽しい晩であろうと期待をかけつつ胸をはづませて月光のもと Heath の丘を颯爽と馬を走らせるケージーの姿は同じく Heath の丘を勇壮に駆け廻った母親のカザリンを偲ばせる。作者エミリーの心も作中の馬と共に愛する Haworth の丘を走り廻る。少年リントンは気むづかしい子供で時には機嫌よく時には手も附けられない程荒ばれるむらぎな少年であるが、彼女は辛抱強く毎夜のように少年を慰めに行く。エミリーの表わす女性は愛情に於いては献身的で、この点表現法は異なるにしても姉 Charlotte の描く女性と全

く同じである。

その嵐が丘にはケージイーが全々知らなかったもう一人の従兄 Hareton がいた。これはカザリンの兄 Hindley の一人息子であるが、復讐の念にかられるヒースクリフのために教育さえも受けさせられず野育ちのまま成長し字も読めない状態である。ケージイーの前で恥しい思いをしたこの若者は努力の末、玄関の字だけは読めるようになってこれをケージイーに認めて欲しいと思ふ処がある。

(5) “He reddened-- I saw that by the moonlight-- dropped his hand..”  
(ibid)

Hareton が顔をあからめていることが月あかりによく分る。この若者も亦美しい従妹のケージイーに心惹かれていることが想像出来る。

馬を馳せて少年リントンの所に通ふ処はケージイーがリントンと結婚せざるを得なくなる処であり、月あかりにヘアトンのほづかしそうな顔のはっきり分る処は、やがてヘアトンと結ばれることになることを暗示しており、共にケージイーの運命の turning point となる処であるがどちらをも月がその転回時点をマークしている。

少年リントンと少女ケージイーを結婚させるのは、両家を乗り取ろうとするヒースクリフの強引な意図であるから病弱で到底結婚生活に耐えられそうもない少年を勇気づけたり嚇したり、手を変え品を変えてケージイーを Heights に引き入れさせるように仕向ける。次には無理矢理にケージイーを部屋に閉じ込めて二人を結婚させてしまう。常識では考えられぬ程乱暴な彼の仕打ちであるが子供時代に受けた侮辱に必ず復讐の手を打とうと企んでいる彼は執念の鬼となり、執拗に計画を実行する。

エドガーは妻を失いめっきり弱っている処へヒースクリフの腹黒い企みにあって大事な一人娘のケージイーは彼の家に人質も同然に閉じ込められて急速に体が弱りきってしまい生きる元気もない。ケージイーはあらゆる方法を講じて逃げ道を探し出そうとして苦心の末に抜け出すことに成功し、実父の体を氣遣いつつ Grange へ戻って来る。

(6) “The harvest moon shone clear outside. It was not the attorney. My own sweet little mistress sprang on my neck, sobbing--  
“Ellen. Is papa alive?” (Chapter XXVIII)

一年中の月の一番美しい秋、「お父さんはまだ大丈夫？」とケージーはかけこんで来る。どうにか一すじの気力だけで生きぬいたエドガーは娘の顔を見ると、すっかり安心して静かに息を引き取る。父の死、これも勿論ケージーの運命の turning point となる。父の居ない家に彼女は居ることは許されぬ訳であるからどんなに帰えりたくなくとも Heights へ再び戻らねばならぬ。再び月は転換時点をマークしている。

それでもなおケージーは実家をなつかしんでずっとそのまま父なき後の広い家に女中のネリーを相手に住み続ける。母 Catherine が死んでから十八年の歳月が既に流れ去っていたのであった。その間ヒースクリフは頑強に生き抜き彼の復讐を着々と進めて来た。十八年振りにこのリントン家に顔を出す。

(7) "It was the same room into which he had been ushered, as a guest, eighteen years before : the same moon shone through the window; and the same autumn landscape lay outside. We had not yet lighted a candle but all the apartment was visible, even to the portraits on the wall: the splendid head of Mrs. Linton, and the graceful one of her husband. Heathcliff advanced to the hearth." (Chapter XXIX)

十八年前彼が案内されて入って来た同じ部屋、同じ月が窓からさしている、外は全く同じ秋の景色である。まだ灯もともさず坐っていたが月光が流れこんで壁にかかったカザリンの肖像画もその側の優雅な顔のリントンの肖像画も生ける人のように彼等を見下している。ヒースクリフは炉側へと進む、十八年前突如としてここに姿を現わした時はカザリンの心を奪い去り、今度はその娘ケージーの体を Heights へと奪い去ろうとしている。十八年前と少しも衰えぬ立派な体格、凛々しい顔立ちではあるが復讐に燃える彼は別人のような凄みを帯びている。如何なる抵抗も無力であることを既に充分承知していたケージーは心ならずも Heights へと連れ戻されて行く、したがってここでも月は彼女の生活の転換時点を標示するものとなっているのである。

いやいや Heights へ連れ去られたケージーは再びリントンの部屋に入れられるが、彼は既に病気が重っている。狂暴なヒースクリフは自分の息子の為に医者もあてがってやらないので、彼女はたった一人で病気の夫を見守ったまま、どうする術もなく幾日かの看病の後夫の死を一人で見つめなければならないような酷い目に逢う。疲れ果てたケージーは若い未亡人として Heights に残る。

さてここで Heathcliff の死を扱っておかねば話の筋を追うことが出来ない。死んだカザリンは亡霊となって十八年間もヒースクリフを悩まして来た。よくそれに耐え抜いたヒースクリフは自分の復讐も完全になし遂げ Earnshaw 家、Linton 家の両方の実権を握った今、彼はこの地上での仕事のすべてを終りカザリンのこののみを考えるようになった。恍惚とした夢遊状態に陥って食事も喉を通らぬまま何事も頭に入らず、ふらふらと外出してまぼろしを追うて歩く。雨に打たれればずぶ濡れに濡れ乍らもカザリンの霊に憧れつつ喜びに溢れて死んでいく。遺言としてエドガーとカザリンの墓に自分も埋めて貰うように云いのこす。

今や二つの魂は完全に一体となり地上で許されなかった結合は、死後の世界に於いて果される。嵐によって代表されるような性格のヒースクリフは嵐と共にこの世を去る。

作者エミーの理念に於いては現世的な夫婦というつながりは真に価値あるつながりではない。そうした現世的なものを超えた物、深い愛情すなわち idealistic loveこそ何物にも換えがたいものだと考えている。

時は経過してこの物語りの本当の語り手 Lockwood は Wuthering Heights をふと訪れて見る。

(8) "I turned away and made my exit, rambling leisurely along, with the glow of a sinking sun behind, and the mild glory of a rising moon in front-- one fading, and the other brightening-- as I quitted the park, and climbed the stony by-road branching off to Mr. Heathcliff's dwelling. Before I arrived in sight of it, all that remained of day was beamless amber light along the west : but I could see every pebble on the path, and every blade of grass, by that splendid moon." (Chapter XXXII)

Grange の館を出るとぶらぶらとヒースクリフの家の方へと足を向けると丁度後には入日が色薄らぎ、正面には月は昇りかけて徐々に明るさを増して来る。庭園を出るころには、その美しい月明りに庭の小石まで数えられる程である。

一枚一枚の草の葉迄もよく見える。姉シャーロットに於いては入日は傾き月が一方から昇りかけるという光景は屢々用いられ姉シャーロットの好む情景であるが、妹エミリーに於いてはこの入日と月が一緒になる処はここだけである。而も彼女にしては珍し

い迄の丁寧な描き方である。

そこには二つの人影があった。ヘアトンとケージーの二人で、二人はヒースクリフ亡き後の大きなひっそりした邸宅の窓辺に寄りそうて腰かけている。一人が他に何かを教えているらしい。他は教えられるままに声を出し素直に幾度も繰返し読んでいく。平和な様子が心をあたためてくれる。二人から洩れて来る会話から察すれば勉強が終れば一緒に月夜の散歩に出るらしい。

“Then they came to the door, and from their conversation I judged they were about to issue out and have a walk on the moor.”

(Chapter XXXII)

かくして、一方は傲慢な蔑みをやめ、他は粗暴な憎しみも屈辱も忘れて二人は急速に理解を早め、やがてお互いの愛は成就されてゆく。根が善良な Hareton は読み書きの手ほどきを受けると教養を一つ一つ身につけて、ケージーに応わしい相手に変貌していく。ケージーの方でも彼に教えるだけが興味ではなくなっている。お互いにヒースクリフの残忍な企みに傷めつけられて苦しい運命を辿つて来た人達であれば、この辺で静かな幸福を味っても当然であろう。月の光は今や幸福な平和への turning point となっている。

“As they stepped on to the door-stones, and halted to take a last look at the moon-- or, more correctly, at each other by her light..”

(Chapter XXIV)

二人は静かに月夜の庭に出ていく。別れる前に明るい月の光の下でお互いの顔をもう一度よく見ておこうとして立ち停まった時嵐の後に来る閑かな青空にも似た平和な安らぎの mood の中に二人は立っていたのである。

“(Emily) She looked out upon a world cleft into gigantic disorder and felt within her the power to unite it in a book. That gigantic ambition is to be felt through the novel -- a struggle, half thwarted but of superb conviction to say something through the mouths of her characters which is not merely “I love” or “I hate” but “We, the whole human race” and

---

“You, the eternal powers”... the sentence remains unfinished” (1)

と V. Woolf はこの小説について述べている。

およそ人間的愛情というものは動物的な愛情すなわち性欲の次元に止ることなく、むしろこれを超克して吾等すべての人間がそれぞれに永遠者から頂いている能力をもってお互の理想的な暮らし方を開発して行こうとする創造的な行為の母体であらねばならぬ。だから人間的な愛情は「I love」とか「I hate」とかいう性愛中心行為の母体となるものではない。ここでも作中の人物がその父祖の醜い執念と闘争に面を背を向けて他人の幸福のために各人のもてる力のすべてを惜しみなく与えようとする時即ち、idealistic love の世界のあることに目覚めて来た時、月は皎々として二人の上に照りだした。

参 考 書

Text	
<u>Wuthering Heights</u>	Emily Brontë (研究社)
<u>The Brontë Story</u>	Margaret Lane
<u>The Life of Charlotte Brontë</u>	E. C. Gaskell

---

(1) “Jane Eyre” and “Wuthering Heights” in the Common Reader First Series.